PR

現場で生きる“実践的な学び”を追求する 長崎県立大学

「国際経営学科」編

“正解のない問題”に取り組む 知識と行動力が大きな財産

「グローバル社会で活躍できるリーダーの育成」という現代的な課題と向き合い、確かな成果を上げている長崎県立大学。国際経営学科における「徹底した英語教育」と「体系的な経営学の学修」を両輪としたカリキュラムは、企業からも高い評価を得ている。その具体的な内容とはどのようなものなのか――。同学科の卒業生である横田竜也さんと学科長を務める矢野生子教授に聞いた。

実践的な授業や海外研修で自主性、積極性を引き出す

――横田さんが今の会社に就職した経緯から聞かせてください。

横田　勤めている大阪鋼管㈱は、鉄鋼製品の一つである鋼管の製造、販売を行う企業です。就職活動中、新たに海外取引の窓口となる部署を立ち上げると聞き、志望しました。入社後、実際にその部署で海外からの受注業務に従事しています。また、アジア諸国のインターンシップ生のリモート指導にも携わっています。

矢野　私たち国際経営学科が目指していることの一つに〝グローカル〟、地球規模で考えながら、地域で活動できる人材の育成があります。卒業後、海外の企業や機関で働く人もいますが、横田くんのように国内の企業、しかも地方に拠点を置く企業で海外と関わりのある業務に従事し、地域の活性化に貢献している人も多くいます。

海外とのコミュニケーションでは異なる価値観を受け止めることが大事

――業務の中で、大学での学びはどのように生きていますか。

横田　即戦力となっているのは英語です。国際経営学科ではベルリッツのネイティブ講師等を招いた実践的英語教育を徹底して行っています。私のTOEIC®スコアは、入学時の430点から最終的に学科の卒業要件であり、日常業務を英語でこなせる730点にアップしました。

矢野　英語はグローバル人材の基本ですから、1年次よりシャワーのように浴びるカリキュラムを組んでいます。日々の授業に加え、フィリピン・セブ島での3週間に及ぶ「海外語学研修」も必修。ビジネス英語を含め、グローバル社会で求められる英語力を養成します。一方でこの研修は、現地の人たちとの交流を通じて、生活習慣や国民性の違いなどを肌で感じることも目的としています。

横田　大学時代に異文化や多様性への理解を深める機会があったことは、海外とやりとりする際に生きています。宗教の違いや重要性などを認識できていることで、コミュニケーションが円滑になり、大学での学びが生きていると感じます。

――その他、具体的な授業で印象に残っているものはありますか。

横田　「国際マーケティング論」は、海外市場への参入戦略の立案なども行う興味深い授業でした。商品設計や価格、利益の設定などを学生がゼロから考える。勉強すべきことも多く大変でしたが、もっと学びたい、知識を得たいと自然に思うようになりました。

矢野　講義やゼミでは「課題解決型学習」を重視しています。狙いは、学生の自主性と積極性を最大限引き出すこと。自分たちで課題の解決策を探り、実践してみて、新たな課題にまた取り組む。その中で、知識や考え方に磨きをかけてもらうのです。

横田　大学で答えのない問題がなぜ重視されていたのか、就職してよく分かります。私は今、「冷間引抜鋼管」の価値を海外に発信することにも取り組んでいますが、まさにそのやり方に正解はありません。そこで、動画を使って紹介する企画を立て、自ら工場で撮影。どのように撮影したら興味を持って見てもらえるか、試行錯誤しながら制作をしています。

先生からの指摘が今の仕事に生きている

――国際経営学科では「海外ビジネス研修」も卒業要件になっていますね。

矢野　横田くんはコロナ禍で行けませんでしたが、海外の企業などで約3週間、インターンシップに参加します。派遣先への事前の連絡メールを含め、あらゆることを学生主体で行いますからかなりハードですが、皆「苦しかったが、素晴らしい体験だった」と口をそろえます。海外のリアルな現場を知り、多様性への理解を深める絶好の場となっています。

――横田さんが考えるグローバル人材に必要な力とは何ですか。

横田　多様性の話に関連して、海外のお客さまやインターンシップ生とやりとりしていて感じるのは、自身の考えだけに固執せず、異なる価値観、感覚を受け止めることの大切さ。その姿勢が不可欠だと思います。

矢野　大切なのは「論理的思考力」。筋道を立てて説明することで価値観の異なる人にも真意を伝えやすくなります。またそれは、物事が予想通りに進まないとき、ボトルネックを突き止め、解決策を探るのにも役に立つ。論理的思考力も、グローバル人材に欠かせない力だと思います。

横田　大学でのレポート提出時、「分析が足りない」「整合性が取れていない」と指摘されたことをよく覚えています。おかげで仕事でも、相手が納得できる説明になっているかを常に意識しています。

――お二人の今後の抱負を最後に聞かせてください。

横田　所属している部署は、海外の市場を拡大させていく大事なセクションです。将来的には他部署に海外市場の意義や可能性を伝える役割を担いたい。社内には貿易実務や海外進出は難しいものというイメージもあるので、マニュアル等も自分で作りながら、そうした意識を払拭できたらうれしく思います。

矢野　大学としては、時代の変化に対応できる人材の育成が大きな使命。ビジネスの一線で活躍する人も授業に招きながら丁寧な教育を重ねていく考えです。また、英語力と経済や経営に関する知識は教育の両輪ですが、それらはいわばツール。同時に、周囲から信頼され、知識や技術を生かす能力も大切です。確かな〝人間力〟もしっかりと養っていきたいと思います。

多様性への理解や論理性の養成を教育の中では大事にしている

矢野生子（やの・いくこ）
長崎県立大学 経営学部
国際経営学科 学科長

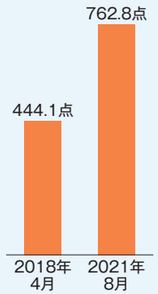
1995年中央大学大学院経済学研究科博士課程満期退学。2008年より長崎県立大学経営学部教授。21年4月より現職。専門は国際経済学。

横田竜也（よこた・たつや）
大阪鋼管株式会社 Asian Promotion部

長崎県立大学国際経営学科を卒業後、2021年4月大阪鋼管㈱に入社。海外取引の窓口であるAsian Promotion部にて受注のほか、各種業務に従事する。

実践的なカリキュラムで学生の潜在力を引き出す

ネイティブによる講義や必修の海外語学研修などによって、国際経営学科では実践的な英語力を養っていく。2018年入学者のTOEIC®スコアの平均点は、2021年8月時点で約320点アップした。



海外ビジネス研修も特徴的な取り組み。海外のリアルな現場での就業体験を通じて、人間的な成長を促している。

●お問い合わせ先／長崎県立大学　https://sun.ac.jp/